

“命は誰のもの”



岡田 玲一郎氏

岡田玲一郎先生(85歳)の講演会が9月28日(金)あかねテイクア室にて開催されました。今回のテーマは「2040年に向けての医療・介護の課題」としてお話され、約100名中30名の看護学生さんが参加しました。



講演の中で、自分ののぞみ(希望)が第一。満足の死は少ないが苦しまないで迎える死。それぞれの死生観(死についての認識)もあり、意見が違ふこともあります。ご家族、友人の方の中で意見一致することが大事です。その場合の決定を主導される人(キーパーソン)はぜひ決めておいてください。

講演会に参加された方々の感想を一部掲載いたします。

(看護学生)
学校の講義で「死」について考えることがあったが、やはり普段から自分の「のぞみ」について家族と話し合っておくべきだと感じた。将来私は医療者の立場になるので、患者さんやその家族が希望される最期を迎えられるようなサポートをしたいと思いました。

自分で自分ののぞみを口で言えなくなつた時に、実現でき

きるように前もって家族と話し合うことが大切だと分かりました。いつか自分も迎える事になる死について考えさせられるいい機会になり、興味深い講演ありがとうございました。

(看護師)
父を看取る際、延命処置を選択しました。本人の意思表示はなく、急変に家族の心が追いついていなかったので、一ヶ月程で父は亡くなりましたが、この時間は父の死を受け入れるために必要であったと思う。今後、事前指定書が普及し日頃から共有しておくことが大切だと思った。

(介護士)
今回の講演会は人生の最期を考える機会となりました。



多くの医療関係者が参加

死をどこか他人事のようなものとして考えるのではなく、誰にでもいつかは必ずやってくるのもとして考えておくことが大事なのだと思ひました。自分の家族とも人生の最期について話す場を持つとうと思ひます。

(支援相談員)
施設の利用者やその家族、私の親の事を思いながら聞き入っていました。医療が進んでいく中で自然に死を迎えることが難しく、またどうしてほしいのかを具体的に伝えないと自分の「のぞみ」が伝わらないと痛感しました。

(事務部)
講演を聞き、改めて家族でどういう最期にしたいかの意思表示をすることが大切だと思つた。

この話を聞きながら今、在宅で療養している父は若さもあり、本人の意思も聞けないまま延命をしています。家族にとつては苦渋の決断だったので。

講演後のアンケートでは、①自分の最期をどうしたい

か、そうしてほしいかを考え、話しあつたことがあります。すかの質問に、「ある37名」「ない3名」②自分の最期はこうしてほしいか考え、事前指定書など書いて保管しています。すかの質問では、「ない86名」でした。

しあわせ国体
福井しあわせ元気国体が、9月29日から10月9日の11日間開催され、福井県は天皇杯1位、皇后杯1位でした。

天皇陛下、皇后さまは、天候が悪い中、開会式参加のため来福されました。

丸岡インターから福井市内の沿道には、一目、皇族車のお二人を見ようとした。皆さんの旗を振りながら出迎えをされています。



天皇陛下 皇后さま